

星映る川「星川」

本町公民館 中村庫二

天正二年（1574）、当時北関東を支配していた寄居鉢形城主の北条氏邦が、本石町の松岩寺あたりから現在の上熊谷駅付近まで堤（北条堤）を築いた。

しかし、元和元年（1623）いつも「荒れ川」で、氾濫を繰り返しては人々の生活を苦しめてきた荒川が、大洪水を起こし、北条堤が決壊して、鎌倉町の石上寺の付近に出来た欠所が、現在の星溪園の「玉の池」である。玉の様な泡が出てきた湧水は、町の中心部を流れ、下流は佐谷田方面の農業用水となった。

熊谷宿の竹井本陣は、本町一丁目にあったが、第14代竹井澹如翁は、明治初年頃「玉の池」を中心に木竹を植え、名石を集め、庭園を造り別邸とした。

竹井家の「玉の池」から湧き出る水は、清らかで透き通るような綺麗な水であったので、星映る川「星川」と呼ばれた。

「星川」の川底は浅く、砂利底であった。子どもたちは、木製のたらいを浮かべ、素足で船遊びをした。しかし、川の水があまりにも冷たかったので、五分と川の中に入っていられなかったという。

その「星川」も、太平洋戦争の最後、昭和20年8月14日夜、大空襲の時、町の中心部が全滅し、多くの市民が火達磨になり、水を求めて「星川」に入った時は、熱湯のように熱かったと言われている。

戦後、熊谷市の戦災復興事業と共に、「星川」も曲がりくねった川が、真っ直ぐになり、昭和30年代には湧水がかれたり、最近では、星川シンボルロード整備事業が完成する等、その姿を変えながらも、今日も多くの人に親しまれている。



（熊谷市公協だより 第37号 平成14年より）